伝　説

この地には、古代より人々が住み、様々な営みがなされた。その中で、今なお語り継がれている伝説が存在する。

17 染井の井戸 地図B-1
（そめいのいど）

この井戸には、大和朝廷の時代、神功皇后が仲哀天皇の白生地の鎧を沈められると、その鎧が真っ赤に染まったという伝説があります。

18 染井神社 地図B-1
（そめいじんじゃ）

祭神　神功皇后[ジングウコウゴウ]
（息長足姫命[オキナガタラシヒメノミコト]）
彦火火出見尊[ヒコホホデミノミコト]
豊玉姫命[トヨタマヒメノミコト]
玉依姫命[タマヨリヒメノミコト]

境内には、伝説に縁のある「ヨロイ掛けの松」がありましたが、現在は枯死し、その幹株が染井神社に保存されています。

ヨロイ掛けの松

染井の奇跡

今から千六百年程昔、大和朝廷の仲哀天皇は九州の豪族・熊襲（くまそ）を討つために、妻の神功皇后を連れて九州へ来られた。

しかし翌年二月、熊襲の二味に襲われ、毒矢により陣中で亡くなられた。神功皇后は、熊襲が強いのは三韓（朝鮮半島南部の国）の後押しがあるからと判断し、三韓に兵を進めるため染井に本陣を置かれた。

皇后は、ある朝、自ら男装し、将兵たちを連れて近くの泉に行かれた。そこで亡くなった天皇の白生地の鎧を高く差し上げ「皆の者、我々は天皇の遺志を継いで、三韓へ向かうが、昨夜神霊のお告げがあった。もしこの泉で鎧が赤く染まることがあったら、この戦いは必勝。もし染まらねば望みなし…とのお告げである。皆心を静めて見られよ」と話し鎧は静かに泉に入れられた。しばらくたって、将兵たちが見守る中、鎧は静かに引き上げられると、泉から出された鎧は色鮮やかに真っ赤に染まっていた。「勝ち戦だ」皇后も将兵たちも我を忘れて叫んだ。

高来寺の山道の途中には鎧を干したという大岩「ひおどし岩」もある。

糸島新聞社発行「糸島伝説集」より

19 幸神社［椚の庚申さま］ 地図C-3
（さいわいじんじゃ）

高祖神社の末社で椚（くぬぎ）地区の鎮守です。この神社に伝説の『椚の庚申さま』があります。

椚の庚申さま
（伊勢から飛んできた氏神）

江戸時代の初め、椚村に利平という男とその妻子がやってきた。なんでも庄屋が犯した罪の身代わりを自ら引き受け、伊勢の国から逃げてきたという。正直で働き者とあって村人の信用も厚くなり、親子三人平和にくらしていた。

そして二十年。働き者の立派な青年になった息子・直吉は、隣村から嫁を迎え、二人の女児をもうけ、仕事に精を出していた。

ところがある日、父の利平が熱を出し、それが老母と嫁に感染し、三人とも床に臥してしまう。二人の幼女をかかえ必死の看病を続ける直吉は、ふと幼いころ聞いた「私たちは、伊勢の国櫛田村からきた者。氏神様は津波岐神社。氏神さまは、氏子の一生に一度の願いは必ずかなえてくださる」という言葉を思い出し、伊勢の国に向かって熱心に祈った。

その翌日の夕方、一人の旅の老人が直吉の前に現れた。老人が「ご病人、起きなされ」と言い手を掛けるや否や、三人はみるみる生気を取り戻し、床に起き直った。「あなた様はいったい…」感涙にむせぶ直吉に「わしは伊勢の津波岐神社の庚申じゃ。そなたを助けに空を飛んできた」そう言い残し、老人は輝く光の矢となって星空に消え去った。

利平一家は庭に庚申塔を祀り、病の平癒を祈る村人が椚の山道に列をなしたという。

糸島新聞社発行「糸島伝説集」より

20 妙立寺 地図C-2
（みょうりゅうじ）

この寺にある如意輪観音菩薩は妙立寺奥の観音菩薩堂に安置されており、お参りすれば何でも叶うと伝えられています。

渡唐を拒んだ仏像
（高祖の如意輪観音さま）

承和二年（八三五年）の秋、京都比叡山の慈覚大師が、仁明天皇の命により唐に留学するため今津に到着された。

船の準備も終わり、いよいよ錨を揚げ、帆を張って出港しようとすると、不思議なことに船が一寸も動かない。船頭たちを総動員して調べてみても原因がわからず、また皆が力をそろえて漕いでみても船は一寸も動かない。

慈覚大師は、「これは観音像の御座の位置が悪いのかもしれぬ、他の場所に移してみよう。」と仏像に手をかけてビックリ、高さ僅か十センチほどの木彫りの小さな仏像が、テコでも動かない。

「これは唐に渡ることを望まれぬのかもしれぬ。拙僧が背負って一度船から下ろしてみよう。」慈覚大師の一言が聞こえたのか、仏像は一瞬にしてもとの軽さになられ、大師に背負われて浜に下られた。すると仏像を背負った大師はそのままスタスタと小船に近寄り、その小船を漕いで対岸の今宿に渡り、振り向きもせず南の方に向かわれた。その足どりは夢遊病者のようであった。大師の足は、今の高祖の観音堂まで来てパタリと止まり、その場で堂宇をしつらえ観音像を安置して日夜礼拝と読経に明け暮れ、やがて自ら白雲山如意輪寺と号して同寺の開祖となった。

今津海岸での不思議な出来事と、渡唐中止のことは、ただちに使者によって京都にもたらされたが、天皇からは何のおとがめもなかった。

糸島新聞社発行「糸島伝説集」より